



空振りには自分の意志

中学1年生の時に、2年後の受験を考えていた人はどれくらいいるだろうか？ おそらくほとんどいないと思うのだが、それと比べると、今週の進路関係の講演は、やはり日比谷が「進学指導重点校」であることが納得されるような内容だったのではないか。

しかし、このことは入学当初から言ってきたことでもある。例えば、学年集会などの際に、「中学校の時の勉強は定期考査を目標にしてやってきたと思うが、高校での勉強は3年後を見据えてやるものだ」ということを何回か伝えたつもりなのだが、覚えているだろうか。副教材や長期休業中の課題を自分でしっかりこなすこと、解き直しをきちんとやること、といった内容の話は、それを具体化したものだったのだが、それもうまく伝わっていただろうか。

S藤先生もおっしゃっていたが、進路については、最終的に自分で決めなければならない。だから、結論が出なくてもよいから、機会があるごとに繰り返し繰り返し考えることが大切なことになるわけで、今回の講演もそんなきっかけになれば…ということである。同時に、進路がまだはっきりしていないからこそ、いざそれが決まってきた時に、どんな進路でも選べるような学習を積み重ねることの大切さも伝えたかったわけなのだが、伝わっただろうか。

*

そういう観点から振り返ってみると、例えば今日のスライド8にあった、「最難関私立大学（早・慶）の合格者は、そのほとんどが難関国立大学の併願者である」という情報は重要な意味を持つだろう。私立大学は、難関

国立大学に比べると入試科目が少なく、一見受験勉強が「楽」そうに思えるけれど、それは逆にいえば、進路を選択し直そうとした時に、大きな障害になる可能性がある、つまり、受験準備していない科目（受験に対応できない科目）を増やしてしまうことにもなるということでもある。

スライド16には、一橋から東大への志望変更例、東工大から東大への志望変更例が出ていたが、前者の場合なら、二次試験で受験しなければならない地歴科目が1科目増えることになり、後者の場合では、同じく国語が増えることが指摘されていた。受験途中で志望変更する場合、科目が減るなら可能性はあるが、科目を増やす志望変更は、なかなか難しいというのは、想像に難くないはずだ。

というわけで、安易に志望を決めるのではなく、しっかり悩み、納得のいく進路選択をしてほしいし、だからこそ、生活習慣・学習習慣を確立して、1日4時間の学習時間を確保しながら、どんな志望にも対応できる力を養って欲しいと我々は願っているわけである。

*

S藤先生の話で面白かったのは、「空振りは意志的なもの」という所。もちろん「意識して空振りした」（こういう作戦もあるだろうが…）のではなく、「打とうという意志があったからこそ（結果として）空振りになったのだ」という指摘である。野球解説者も、見逃し三振は「最低だ」とよく言っているが、つまり、行動しなければ結果はついてこないということであろう。大切な指摘である。